

ランブイエ邸の復元平面図からの考察 －17世紀パリの邸館インテリアの発展－

片 山 勢津子*

A Study on the Restored Plan of Hôtel de Rambouillet －Development of Hôtel Interior in Paris in 17th Century－

Setsuko KATAYAMA

This study is to show the spatial characteristic by restoring the plan of Hôtel de Rambouillet in Paris, and to consider the elements which caused the development of interior design.

The restoration of the plan is made according to the imprints of the Rambouillet's plan which remain in the two study plans of Louis Le Vau, new materials. And I make the forms of the site and buildings clear, which have ever been unclear. As a result, Hôtel de Rambouillet is proved to have been planned in view of the changes in visitors' movements and looks. Many of the devices are found in the buildings and interior designs of the later hôtels. It is confirmed afresh that Hôtel de Rambouillet had a great influence on the changes and development of hôtel architecture and interior design.

1. はじめに

本論は、ランブイエ邸の空間構成を平面図の復元によって明らかにし、室内装飾の発展要素について考察を行うものである。

ランブイエ邸 (Hôtel de Rambouillet) とは、サロン文化をフランスに広めたことで知られるランブイエ侯爵夫人 (Marquise de Rambouillet, 1588-1665) の自邸である。夫人がサロン開設後、パリの貴族の館では貴婦人が客人を招く習慣が流行し、文学や言語、マナー、室内装飾が発展した。当時の記録であるアンリ・ソーヴァル (Henri Sauval, 1620-69 or 70)² が残したパリの歴史書 “Histoire et Recherches des Antiquité de la Ville de Paris (1724)”³ の、邸館 (hôtel) の事例の最初に「最も素晴らしい館」としてランブイエ邸が紹介されている。なお、本論では身分階層の館を邸館 (hôtel)、庶民の住宅を邸宅 (maison) と訳して区別する。ランブイエ邸で最も有名なのは、夫人のサロン

『青の部屋 (Chambre Bleu)』で、当時としては珍しい青色のファブリック材でカラーコーディネートされた。その他にも画期的であったと指摘される点が多々あるが、図面が残存しないため不明点が多い。これまで復元を試みたものとしては、ジャン＝ピエール・バブロン (Jean-Pierre Babelon) の研究⁴ があるが、その図 (図1) は未完部分のあるラフなもので、不明点は解消できていない。

本論では、建築家ルイ・ルヴォー (Louis Le Vau, 1620?-1670) のルーブル宮殿拡張案の図面2点に見つけたランブイエ邸の平面図の痕跡を手がかりに、新たに平面図を作成して、ランブイエ邸の革新性について検証を試みる。ここでいうルヴォーの図面とは、1660年と1664年のルーブル宮殿拡張計画案で、ルーブル宮殿とチュイルリー宮殿、コレージュ・デ・キヤトルナシオン (Collège des Quatre-Nation) の平面図が書かれているものである (図2、図3)。1664年の図面では、ラン

*本学准教授

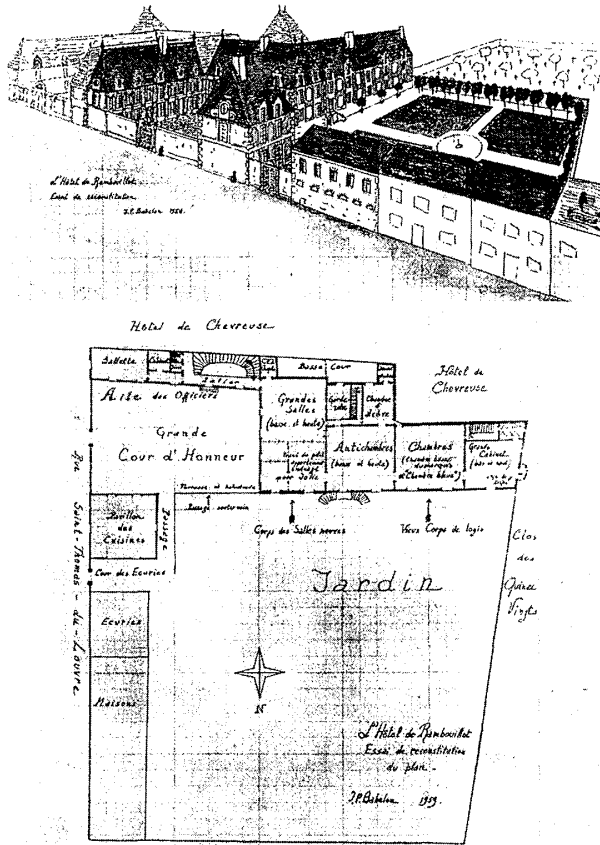


図1 ランブイエ邸推定図 (Jean-Pierre Babelon, 1960)

ブイエ邸の一部がルーブル宮殿拡張部分の下敷きになっているため全体の判別は困難だが、1660年の図面ではランブイエ邸全体を確認できる。

復元の資料としては、前述のソーヴァルの図書の記述 (第2巻第7章、3巻第14章)⁵の他、ルイ・サヴォアの建築書 (Louis Savot: L'ARCHITECTURE FRANÇOISE DES BASTIMENS PARTICULIERS, 1624, 1635, Paris)⁶を参考とする。この書は、邸館の施主のために書かれた住宅建築のための手引書で、当時の建物や部屋について詳しい。

2. ランブイエ夫人とサロン

夫人の本名は、カトリーヌ・ド・ヴィヴオンヌ＝サヴェーリ (Catherine de Vivonne-Savelli)、父はローマ駐在フランス大使ピザニ侯爵、母はローマの四大名門貴族の一つサヴェッリ家出身である。ローマ生まれで、幼少の頃から学問芸術を広く修め、特に語学が堪能であったと言われる。7歳で家族とともにフランスに移り住み、1600年にアミアンの司教代理シャルル・ダンジェンヌ (Charles d'Angennes) と結婚、夫妻は2男5女に恵まれ

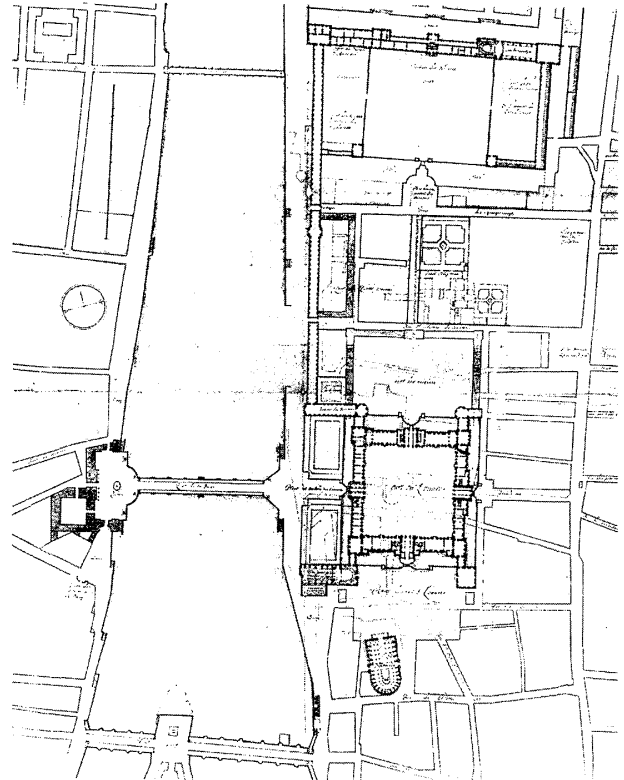


図2 ルーブル宮殿拡張案 (Louis Le Vau, 1660)

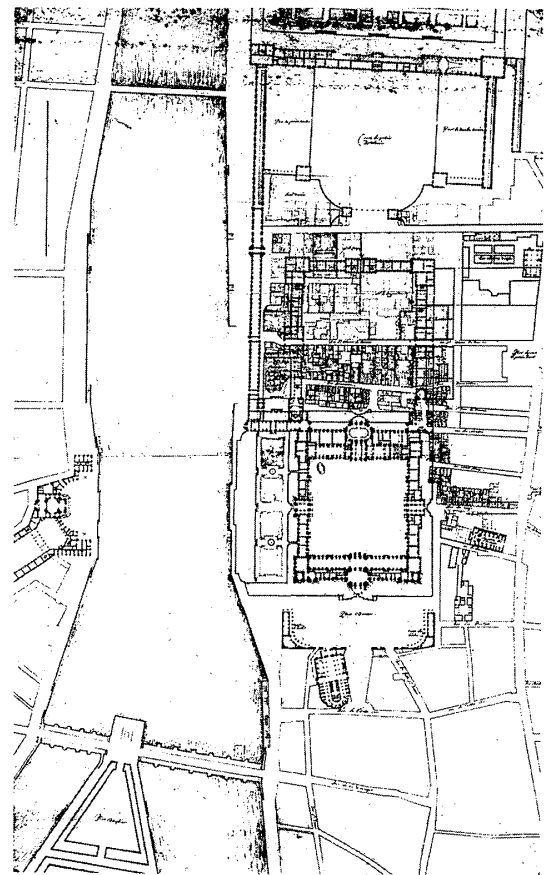


図3 ルーブル宮殿拡張案 (Louis Le Vau, 1664)

る。夫は、1611年にランブイエ侯爵を襲名、ルイ13世の衣裳部屋係や旅団長を務め、後に外交官に転じた人物であった。長女は後年ランブイエ邸のサロンを手伝ったことで知られるジュリー (Julie de Rambouillet, 1607-71) である。

夫人はジュリーを身籠った19歳の時、病気を理由に宮廷を退出する。夫人は病弱であったらしいが、当時宮廷の社交界を辞することは極めて稀で、アンリ4世時代の粗野な宮廷に嫌気がさしたことが一因と、一般に考えられている。

ランブイエ夫人のサロンはいわゆる文芸サロンで、貴族や文筆家が集まり、アカデミー会員が多かったことも特徴である⁷。サロンはフロンドルの乱で一時中断するが、夫人が亡くなる1665年まで継続し、その間、小規模な工事が度々行われた。

3. 敷地概要

ソーヴァルによると、敷地は、税金支払い義務のある特別な地区にあった。サン・トマ・デュ・ルーブル通り (Rue de St Thomas du Louvre) に面し、シュヴルーズ邸 (Hôtel de Chevreuse, 図4)⁸ に隣接し、盲人施設キャーンズヴァン病院 (Hôpital des Quinze-Vingts) の庭園と境界をなす。

当時の様子は、ゴンブースト (Gomboust) の地図 (1661) で確認できる⁹ (図5)。通りは、ルーブル宮殿とチュイルリー宮殿の間に位置し、宰相リシュリューの館 (後にパレ・ロワイヤル) からセヌ川の栈橋に至る道である。敷地は通りに東面し、南がシュヴルーズ邸、北は邸宅 (maison)¹⁰ と接し、病院に面する西側には樹木が並ぶ。ランブイエ邸の建物は、西北にあるイタリア式庭園を囲み、北側の低い建物と南側の高い建物からなる。ソーヴァルは、ピザニ侯爵が邸館と邸宅を連結し

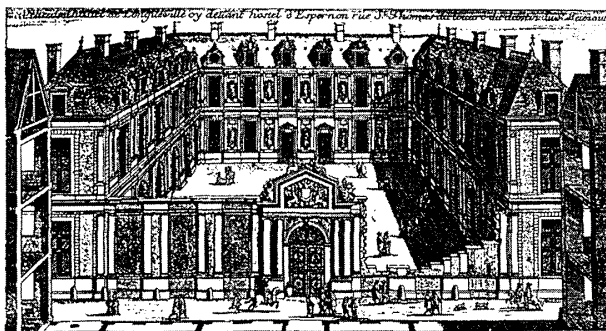


図4 ロングヴィエ邸 (1615、後年シュヴルーズ邸)

なかったと記述しているので、建物の大きさから、北が邸宅部分で南が邸館部分と推測できる。

ところで、エミール・マーニュ (Emile Magne) の著書¹¹にランブイエ邸外観図 (図6) なるものが存在するが、その構図からゴンブーストの地図を元に庭園越しに邸宅部分を描いたものと思われる。邸館部分を描いていないため「ランブイエ邸外観」と称するには問題があることが分かる。

一方、ルヴォーの図面では、側翼部分がシュヴルーズ邸と接しているため境界を判別することが難しいが、ゴンブーストの地図やバブロン¹²の描写から感じる不整形な印象とは異なり、敷地は矩形

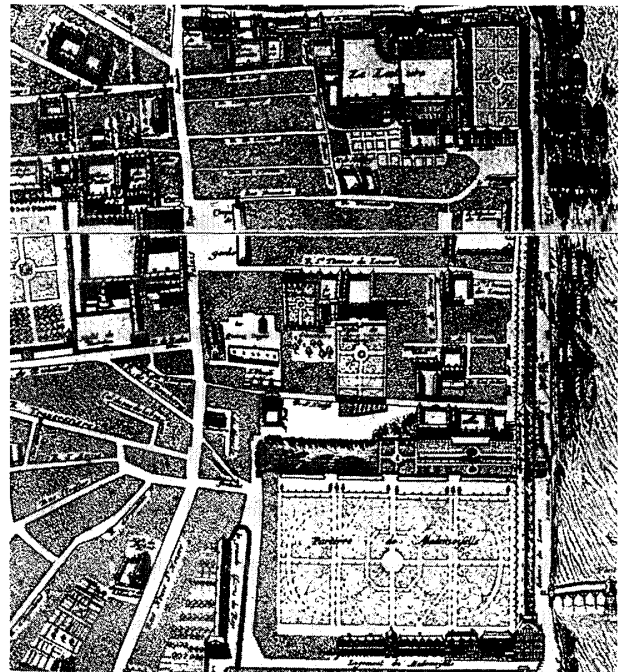


図5 ランブイエ邸周辺 (Gomboust, 1661)
上部が東、中央右はシュヴルーズ邸

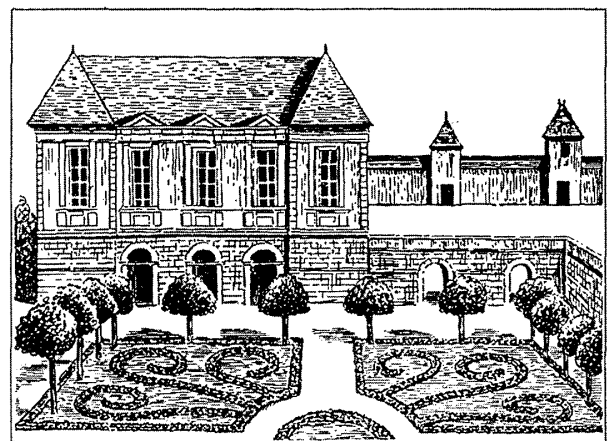


図6 ランブイエ邸外観図 (Emile Magne, 1929)

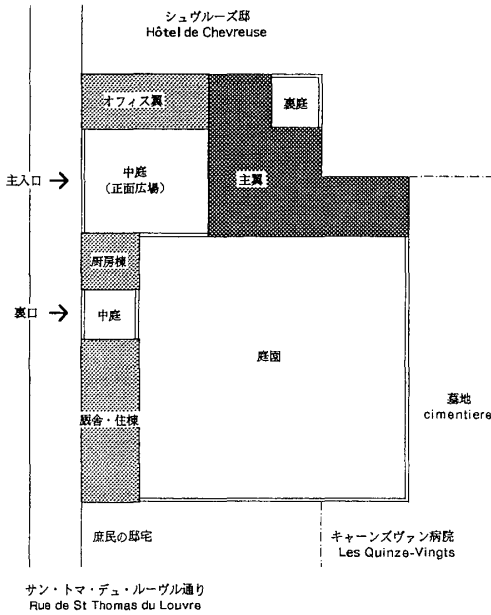


図7 ランブイエ邸の推定ブロック図

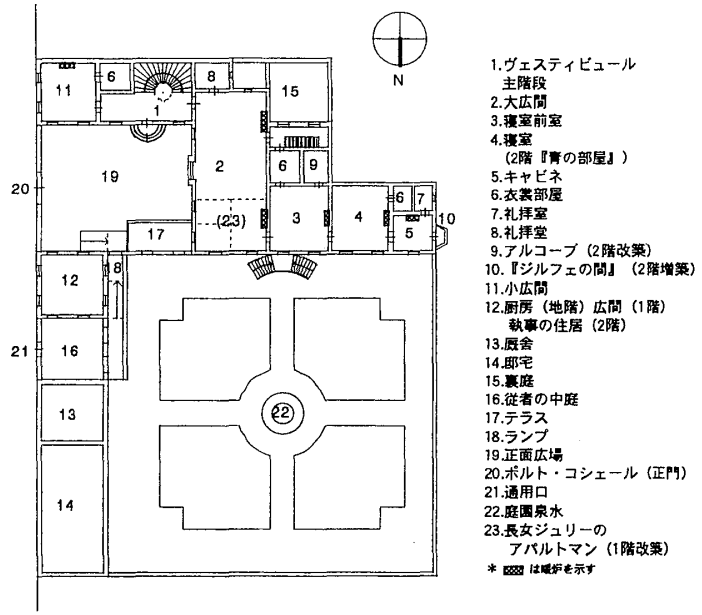


図8 ランブイエ邸の復元平面図

の集まりで、建物の大きさも異なる。そこで、ルヴォーの図面をもとに建物のブロック図を描いた(図7)。ただし、シュヴルーズ邸と接する南側、特に裏庭部分は境界が判断できていない。隣地がさらに食い込んでいる可能性もあるが、この部分は裏方部分なので、本論では整形して描く。

4. 着工までの経緯

ソーヴァルによると、ランブイエ邸の元は由緒ある貴族所有の建物だったが、13-14世紀建造のため当時の法則にかなっていなかった。2つの建物からなり、主建物は翼部が道に面し、他方は庭園と中庭と裏庭に面する。ピザニ侯爵が1606年に取得、1611年ランブイエ夫妻が相続する。

次に、パブロンの研究から、ランブイエ邸工事の経緯について紹介する。

1614年：キャーンズヴァン病院の墓地に面して4つの窓を作る権利を取得

1615年：パリの市民のうち200人だけが許されていた『チュイルリーへの水道管』に配管できる特権を取得

1618年：着工

1619年：建設中の暖炉を支えるために墓地の中に支柱を1本設置する許可を取得

工事は司法の仲介によって中断し、その後の工事は、ランブイエ夫人の計画案に基づいて、マルク・

ピオシュ (Marc Pioche)¹² が工事監理を担当した。夫人自身が計画図面を引いたことについては、ソーヴァルの他、スキュデリー嬢 (Madeleine de Scudéry, 1607-1701) の記述¹³ や従兄弟ターマンの記述¹⁴ から確認できる。

5. 復元平面図の作成

ルヴォーの図面とランブイエ邸の資料を元に、平面図を作成した(図8)。以下に手順を示す。

1) 庭園の噴水と植え込みを描く

最初に庭園を描くのは、庭園中央の位置が重要だからである。庭園中央の位置決めは、建物の庭園側外観の軸線を決めることであり、外部階段と主翼の開口部の位置を決めるために必要である。

2) 壁を描く

位置については、サヴォの建築書を拠り所として、慣例と思われる部屋の大きさや構成を考えながら決定した。例えば、寝室は正方形で、寝室前室 (antichambre) は寝室 (chambre) の大きさに揃え、寝室奥にはキャビネ (cabinet) と衣裳部屋 (garderobe) を設けた。

3) テラスの位置を決める

ルヴォーの図面(1664)には、中庭に面した主翼の中央部にパヴィリオンらしき表示が見えるが、その位置は門からみるとやや左側にずれている。当時の主翼正面の外観は左右対称が原則なので、

正面中心をパヴィリオンの位置としてオフィス翼と対称になるようにテラスの位置を決めた。

4) テラスと厨房棟の間にランプを作る

ランプを配置することで、別棟の従者の中庭へ馬車が通ることができる。また、ランプとテラス下部に厨房棟との連絡通路が配置できる。バブロンによると建物地階は厨房、1階は従者の広間、2階は執事室であった¹⁵。なお、テラスとランプは、バブロンが図示できていない部分である。

5) 窓の位置を決める

ルヴォーの図面 (1664) からオフィス翼中庭側の開口部5つを読み取り、位置を決めた。また、それと対称の位置に厨房棟とテラスの扉の開口部5つの位置を決めた。中庭に面した主翼の4つの開口部については、中央パヴィリオンに1つ、残りは左右対称になるように整えた。さらに庭園側は、庭園の軸線部に開口部が位置するように、またサヴォの図書に照らして、室内側プロポーションがおかしくないように、全体を整えた。

6) オフィス翼にペロンを配置する

ペロン (péron) とは入口前の階段である。主階段の上る方向とペロンの位置は、2階の大広間への動線を考え、さらに詩人ヴォアチュール (Vincent Voiture, 1597-1648) の記述「実のところ回廊なのかペロンなのか…」¹⁶ を考慮して、回廊にペロンがついたような格好で主階段の上り口前に描いた。

7) 庭園側外部階段の位置を決める

庭園側外観を考慮して、庭園軸線上に外部階段の位置を決めた。これは、サロンの常連達が、侯爵のアパルトマンに入り裏階段を通過して夫人のアパルトマンに入ったという記録に合致する。

8) 礼拝堂を配置する

ゴンブーストの地図で確認して配置した。

9) 夫人の礼拝室を配置する

墓地に面した開口部の一つが、2階にある夫人のキャビネ横の礼拝室であると考えて位置を決めた。キャビネ横の残りの部分は、寝室からアクセスできるので、衣裳部屋であろう。

10) 改築・増築部分の位置を決める

2階の夫人のアルコーブ付き寝室はバブロンの図のように寝室からのアクセスがあったと思われ

る。しかし形が不明であり、また1階平面図と兼用して描いているので、寝室前室のみからのアクセスとした。2階のアルコーブは、夫人が寒さと暖炉の日照りから逃れるために使用したとされるものである。娘ジュリーのために後年作られたとされるアパルトマンは、一般的な構成である寝室・キャビネ・衣裳部屋の3室を1階広間の庭園側に破線で記した。さらに、サロンの座興として増築された2階のジルフェの間を、夫人キャビネ西の開口部分に張り出して作った。この部屋は秘密裏に作られて、突然出現したといわれる場所である。

11) 細部を決める

暖炉や入り口等の細部の決定に際しては、サヴォの建築書を参考にした。例えば、部屋ができるだけ左右対称になるように開口部の位置を整理し、戸口は軸線が通るように、また戸口を入った正面の壁の中央に暖炉を配置した。

12) その他

ランブイエ邸が初めて導入したと言われる浴室については、主翼1階裏庭付近に増築されたものと思われるが、位置を確認することはできなかった。浴室について、サヴォは「必要ない」と断った上でキャビネを備えた浴室について詳細に記述している。おそらく、彼はランブイエ邸の浴室を参考に記述したのであろう。なお、裏階段については、ルヴォーの図面に倣って描いたので、バブロンの図とは位置が若干異なる。

5. 建物の特徴

1) 外観

旧邸を残しながら、当時の邸館の法則に適うように工夫したと思われる点が幾つかみられる。まず、前面道路からみて対称に見えるように、門を中心に厨房棟と側翼を配置している。門から中庭に入ると、側翼が片方しかないので中心軸がずれるが、それを解決するためにオフィス翼と対称の位置にテラスを設け、さらに中央にパヴィリオンを設けて不備を補っている。ソーヴェルによると、外観はイタリア風でレンガと隅石にスレート瓦を組み合わせたもので、大建築の手法であったがその後ブルジョア階層で流行する。このことから規模の小ささを、華やかさで補ったと考える。

2) 正面中庭

テラスを増築しているため、当時の邸館としては中庭の幅が足りないが、テラス越しに庭園が見えるので明るくて広さを感じさせず、さらに訪れる人に好奇心を与える。

3) 庭園

ソーヴァルが「多くの不思議が語られる名高い庭園」と呼ぶ庭で、裏庭からアクセスでき、奥まっているため静かな別世界を形成する。フランスには珍しい花が咲き誇り¹⁷、夫人は木陰で鳥のさえずりを聞きながら寝入ったといわれる¹⁸。中央に噴水のある庭園は、ランブイエ夫人の私室から見えるチュイルリー宮殿の『マドモワゼルの庭園』にヒントを得たとされる苦心の作で¹⁹、詩人マレルブ (François Malherbe, 1555-16728) は『円形の泉水 (rond d'eau)』と詠った。

4) 建物入口と主階段

当時、入り口は主翼中央にあるのが常であったが、翼部に入口を配置し、広間の大きさを確保した。主階段は大きな踊り場のある半円形にカーブを描く階段で、トップライトからの光が差し込んだ。この配置についてはランブイエ邸が初めてという説もあるが、すでにアンリ2世の娘の邸 (Hôtel d'Angoulême, 1584) にみられるので、恐らく、そこからヒントを得て夫人が考案したと思われる²⁰。

5) 主翼動線

当時まだなかった配置であるが、入口から主階段、そして2階の大広間への動線に無理がない。階段室から広間へは90度曲がるが、さらに広間から夫人のアパルトマンへも90度曲がるため、視線に変化があり建物の狭さを感じさせない。また、アパルトマンの戸口が一行に連なるので、奥行きと格式を感じさせる。

6) 裏まわり動線

主翼と厨房棟は別の建物で用途も全く異なるが、テラスとランプの下部を利用することで動線を確保している。

7) フレンチウィンドウ

ソーヴァルの記述によると、窓台のない大きな窓を採用したことにより、アパルトマンの部屋から庭園が見え、楽しみをもたらした。サヴォによると、この形は防犯性から都市部には用いられな

い郊外の建物の開口部であった。つまり、フレンチウィンドウはランブイエ邸が始めたと言われるが、郊外で用いられていた開口部にヒントを得て、ランブイエ夫人が採用したと考えられる。

8) その他

ランブイエ邸が初めて導入したと言われるもののうち正確に確認できなかったものとして、他に、ヴェスティビュール (Vestibule、風除室) と食堂がある。ヴェスティビュールについては、入り口の位置が側翼部に配されて外気が直接入室に入らず快適であったため、新しい部屋として認識されたと考える。サヴォはヴェスティビュールを「単列配置 (corp de logis simple) には適合しないもので、二列配置 (corp de logis double) にのみ用いる²¹」と記述している。さらに、「単列配置はフランスに通例の配置」と断っていることから、ランブイエ邸が当時珍しいイタリア風の二列配置であったことがわかる。また、食堂については、ジュリーのアパルトマンができてから、広間部分にあったのではないかと想像するが、確証はない。

6. おわりに

ルヴォーの図面を新たな資料として復元した結果、これまで不正確であった敷地や建物の形状を明確化し、テラスとランプ部分を補うことができた。その結果、門から中庭の軸線のずれをテラスによって解消したことが分かる。この方法は、建物入口を側翼に配したことでさらに成功している。ランブイエ邸に関する記録に見られる当時の驚きは、こうした視線や動線の巧みさがもたらしており、夫人のイタリアでの経験と才能が生み出したと思われる。これらの工夫は其後の邸館に見られる²²もので、建築構成の変化がインテリアの発展につながったと考える。

ランブイエ邸の特徴は、計画者が貴婦人であった故に可能となったと言えるのではないだろうか。なぜなら、特徴としてあげられる点は、いずれも生活者でありサロンに人を招く立場からの工夫だからである。ソーヴァルは「建築家に楽しみ (agrément) と心地よさ (commodité) と完全美 (perfection) を教えた」と記している。建築的規範を逸脱した新しい構成の建物は、サロンの主

人であり客人の視点を重視したランブイエ夫人の自由な発想によって可能になったと考える。

【脚注】

- 1 サロンはイタリア語 *salone* が語源で、客を招いて時局や芸術を論じたり優雅な遊びを楽しむこと、及びその部屋を指す。当時はまだその語がなく「リュエル (*ruelle*、寝室のベッドと壁の間にできる空間) に行く」等の言葉が使われていたようだが、ここでは上記の意味で用いる。
- 2 法律家で歴史に詳しく、パリの歴史書を出版予定のまま亡くなった。
- 3 パリの地理、建築物、習慣などについて網羅された歴史書で、私邸の詳細な著述が特徴。
- 4 Jean-Pierre Babelon : *Demeure parisienne sous Henri IV et Louis XIII, du temps*, Paris, 1960
- 5 復刻版の関連部分を参照した (Gregg, 1969, pp.199-202, pp.287-288)。
- 6 1664年まで読まれ、1673年にニコラ・フランソワ・ブロンデル (Nicolas François Blondel, 1617-1686) の注釈付きで再版。本稿では、再版本の復刻版 (Mincoff, 1973) を参照した。内容については拙稿参照 (ルイ・サヴォの建築書にみられる17世紀フランスの邸館建築について、日本建築学会計画系論文報告集、第548号、pp.271-276、2001年10月)
- 7 ソーヴァルは「正確に言えばアカデミーである」と記している。主賓は、詩人マレルブ、詩人ヴォアチュール、ギュエ・ド・バルザック、悲劇作家コルネイユ、客人は枢機卿リシュリユー、ションベルグ、コンデ公妃、その娘ブルボン嬢、ロアン公妃、モンモラシー・ブードヴィル嬢、シャーティヨン公妃、セヴィニエ侯妃、ラファイエット夫人などで、作家モリエールも訪れたことがあるという錚々たるメンバーであった。
- 8 ランブイエ邸の工事の頃はロングヴィル邸 (Hôtel de Longueville, 1615)
- 9 1615年の地図 (Merian) と1675年の地図 (Bullet) ではランブイエ邸を確認できない。
- 10 ゴンブーストの地図では庶民の建物は書かれていないことから邸宅と確認できる。
- 11 Emile Magne: *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet*, Emile-Pail Frères, 1929
- 12 フォンテンヌブロー宮殿で働いた建築家であり技術者で、文筆家として知られるラファイエット夫人の父親に当たる。
- 13 Mlle de Scudéry : *Artamène ou Le Grand Cyrus*, 1656 (Nicole Aronson : *Madame de Rambouillet ou la Chambre blue*, Fayard, 1988, p. 74)
- 14 『タールマンの逸話』 (Tallemant des Réaux, c. 1657-9) として知られる
- 15 Jean-Pierre Bablon , p. 184-200
- 16 Nicole Aronson, p. 77
- 17 Nicole Aronson, p. 74
- 18 Nicole Aronson, p. 83
- 19 庭園のための水源を得るために必死に試みたことが手紙の存在で知られている (Nicole Aronson, p. 83) が、実際には「ちよろちよろ流れる細流」でしかなかったようである (Tallemant des Réaux)。
- 20 この館でアングレーム夫人が養育した姪は、ランブイエ夫人の親友であった (Nicole Aronson, p.78) ので、特徴を理解していたと思われる。
- 21 主翼の部屋が一行に連なるものと *corp de logis simple*、二列に配置されるものを *corp de logis double* と言う。
- 22 拙稿参照 (17世紀フランスの住居の構成とその変遷、ルイ14世様式の成立の背景 その1、日本インテリア学会論文報告集4号、pp. 41-48、1994年3月、17世紀フランスの住居のインテリアとその変遷、ルイ14世様式の成立の背景その2、日本インテリア学会論文報告集5号、pp.75-82、1995年3月)

【図版出典】

- 図1 Jean-Pierre Babelon, p. 185
- 図2 Hilary Ballon: *Louis Le Vau —Mazarin's Collège, Colbert's Revenge—*, Princeton, 1999, Fig.17
- 図3 op.cit., Fig. 80
- 図4 Jean-Pierre Babelon, p. 146
- 図5 Plan de Paris 1530-1808 (復刻, 地図史料編纂会編、柏書房、1994年3月)
- 図6 Emile Magne, p. 49